



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代前期における儒學者の朱子學と陽明學の受容に関する考察 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	関, 雅泉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13402号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74490
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yaquan_Guan_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 関 雅 泉

審査委員	主査	教授	近 藤	浩 之
	副査	教授	弐	和 順
	副査	教授	富 田	康 之
	副査	名誉教授	佐 藤	鍊 太 郎 (北海道大学)

学位論文題名

江戸時代前期における儒學者の朱子學と陽明學の受容に関する考察

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文では藤原惺窩、林羅山、林鷺峰、中江藤樹、熊沢蕃山の思想に関する研究によって江戸前期の儒学者がどのように朱子学と陽明学を受容したか、経学と修養論、政治論を中心としてその実態を明らかにし、江戸時代前期の儒学者がいずれも朱子学と陽明学を折衷的に受容している実態を明らかにすることに成功している。特に以下の三点が評価できる。

①朱子学派とされている惺窩と羅山が、実は陽明学の影響を受けていることを明らかにしたこと。また、惺窩は四書を解釈する当たり、儒仏道三教の合一を説いた林兆恩の説を引用しており、朱子学と陽明学を折衷する見解も見出すことができると指摘している。朱子学の官学化を推し進めた羅山でさえ、陽明学の解釈を採用していることを明らかにしている点は高く評価できる。

②陽明学派とされている藤樹と蕃山が、実は朱子学的見解も支持していることを明らかにしていること。藤樹は陽明学に転向する以前に朱子学を学び、その弟子の蕃山も朱熹の『四書章句集注』を読んで儒学に傾倒しており、陽明学派とされる学者にとっても、朱子学は基本的な素養であったと指摘している。

③江戸時代前期の儒学者が、いずれも基本的に為政者の立場から社会の安定を図り、封建身分制度を肯定していると指摘していること。戦国時代から安土桃山時代にかけて、日本では戦乱や争いが頻発し、社会の安定が切望されたが、江戸時代に入ると、社会はほぼ安定したため、すでに支配階級に属している儒学者たちは身分秩序を固定する見解を示したとも指摘している。

本論文の考察によって、江戸時代前期の儒学者について、井上哲次郎のように朱子学派と陽明学派とに截然と区分するのは妥当ではないということが実証されたと言って良い。

なお、本論文は、学会での研究報告の原稿や、いくつかの研究誌に掲載された論文の成果をまとめたものである。第一章は、「藤原惺窩の『大学要略』について—林兆恩『大学正義纂』との比較—」と題して、『中国哲学』第44号（北海道中国哲学会、2016年）に発表したもの。第二章は、「林羅山『大学諺解』における朱子学の受容」と題して、『中国哲学』第45・46合併号【論考篇】（北海道中国哲学会、2018年）に発表したもの。本章の中国語版は、2017年11月に中国広東外語外貿大学で開催された「東アジア視野における日本の哲学・思想・文化」国際シンポジウムで発表している。第三章は、「林鷺峰『論語集注私考』について—明代の著作の引用状況と『論語』解釈の特徴—」と題して、『研究論集』第17号（北海道大学大学院文学研究科、2017年）に掲載済み。本章の中国語版は、2017年6月に台湾中央研究院で開催された「日本江戸時代『論語』学之研究」国際シンポジウムで発表している。第五章は、「熊澤蕃山における誠意と致知の解釈について—中江藤樹の思想との比較—」と題して、『研究論集』第18号（北海道大学大学院文学研究科、2018年）に掲載済み。第六章は、「熊澤蕃山の『論語』解釈について」と題として、2018年10月に北海道大学で開催された「日中の思想と文化」総合学術会議で発表した研究報告に基づく。補論「林羅山『寄朝鮮国三官使』に関する考察」は、『研究論集』第16号（北海道大学大学院文学研究科、2016年）に発表済み。

本章の中国語版は、2018 年 10 月に中国山東大学で開催された「東方の宗教世界」国際シンポジウムで発表している。いずれも通説に一石を投じて、一定の評価を得ているものである。

・学位授与に関する委員会の所見

審査の過程において、先行研究の見解や通説との違いが分かりにくかったり、明瞭に説明できていなかったりする箇所が若干有ること、文献の読解と考察をもう一步深めて、思想史的な意義の説明が求められる箇所が若干有ること、などが指摘された。また、取り上げた中心資料が限定されているので、江戸時代前期の儒学思想を全面的に論ずるには、今後のさらなる研究の進展と検証が望まれる。これら指摘された問題点はいずれも、筆者も十分に自覚して、ほぼ容易に修正し得るものであり、本論文の価値を本質的に損なうものではない。また今後、取り上げる人物や資料の範囲を広げ、本論文の観点と方法を継続的に発展させることで、江戸前期の儒学思想を全面的に見直すことも十分に可能になるだろう。

以上に基づき本審査委員会は、本論文に示された申請者の研究成果を高く評価し、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。